

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊36年目 Nr. 416

2024年11月号





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

企業と学生との採用就職活動支援と原子力産業への理解向上を目的とする「原子力産業セミナー2026」(主催：日本原子力産業協会・関西原子力懇談会)が10月14日、都立産業貿易センター(東京都港区)で開催された。主に2026年に卒業予定の大学・大学院生・高専生が対象。

同セミナーは10月5日に、大阪市内でも開催されている。出展企業・機関数は両会場で延べ八九ブース(東京会場四六ブース、大阪会場四三ブース)と、二〇〇六年度の初回開催以降で最多。また、来場者数は、計四三三名(東京会場二三名、大阪会場二〇名)だった。

今回、両会場ともに初出展した非破壊検査は、原子力に限らず、高齢化が進む社会インフラの健全性確保を支える「縁の下力持ち」的な企業だ。同社の担当者は、これまで



原子力産業セミナー 2026 東京会場
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/25233.html

蓄積してきた技術力やそのニーズに関して「知らない学生が圧倒的に多い。もっと目を向けて欲しい」と訴え、幅広い分野の学生から関心に期待を寄せた。同社の技術は今年開業六〇年を迎える東海道新幹線のレール探傷にも関わっている。その上で、「こういつた仕事がある、技術基盤があるということをよく知ってもらいたい」と初参加に際しての意気込みを話した。

にも力を入れていく状況だ。キャリアパスの観点から入庁後は、通常業務を離れてスキルアップを図る研修システムの充実も図っているという。

同セミナーに初回より参加している原子力発電環境整備機構(NUMO)の担当者は、学生の感懐として、地層処分に関し「初めて聞く」という人が多いと話す。北海道の寿都町・神東内村では、処分地選定に向けた文献調査が進められるなど、進展がみられているが、地域の信頼を得られるよう「プロフェッショナルの意識」を持つ人材に期待。長期にわたる処分事業の理解に向け、NUMOでは、若手タレントを起用したコンテンツの公開にも力を入れており、今後も次世代層への啓発に向け、地域でのイベント開催や出前授業も積極的に行っていくとの姿勢を示した。

10月に日立造船から社名変更したカナデビア(株)は、新たなブランドコンセプト「技術の力で、人類と自然の調和に挑む」というマインドを強調。新社名は「カナデ(奏でる)」と「ピア(VIA・道)を合わせた造語に由来。原子力関連では、主に海外向けの使用済み燃料輸送容器製造などを手掛けているが、幅広く環境保全の面で企業価値向上に努めており、今回は主に工学系の学生から関心を集めているという。

今回、同セミナーの来場者数は前年度より微増となったが、系列企業の各ブースを回り熱心に説明を聞く理系学生グループや、核融合や小型モジュール炉(SMR)に関して質問が交わされるブースもあり、原子力産業に対して熱意のある学生らの姿が多く見られた。(以上、原子力産業新聞記事「原子力産業セミナー2026」開催ブース出展社数は過去最高より転載。図中URL参照)

ちが訓練され、観光客向けに六〜八頭が音楽に合わせ華麗なショーを披露している。牡馬の性格と体力が演目に適するため、パフォーマンスを行う白馬は全て牡馬である。乗馬学校が設立された一六世紀に、当時のオーストリア・ハプスブルク家がスペインから優れた馬を輸入し、その血統をもとに改良を重ねたため、「スペイン」名が使われている。

一方、京都市北区の上賀茂神社では、白毛の神馬(しんめ)と呼ばれる神聖な馬が飼われ、有名な葵祭や賀茂祭などに登場する。神馬は、神社の守護者や神様のお使いとして特別な存在とされ、祭事には多くの参拝者に神聖な存在として拜まれている。普段は神社内の厩舎にて大切に飼育され、時間帯によっては参拝者が厩舎で神馬の姿を見ることが出来る。この他、京都市内やその周辺地域には、いくつか乗馬クラブがあり、乗馬愛好者や観光客が利用している。時代祭などのイベント時にはこうしたクラブの馬が重要な役割を果たす。時代祭では約三〇頭の馬が行列に参加するが、これらの馬は、平安時代から江戸時代までの装束を身につけた騎馬武者や役人、神職に乗られて登場する。馬は普段は乗馬クラブの専門スタッフや経験豊富な飼育者によって管理・飼育されているが、時代祭の前に、平安神宮や京都市街を練り歩く行列に向けて、当日の行列や大勢の観衆、音などに慣れるための準備が行われる。さらに、京都大学や立命館大学などの馬術部でも馬を飼育・訓練するとともに、競技会への参加や部内活動を通じて、馬術技術の向上を目指している。



余談であるが、ウィーン勤務時に家族で一度だけフィアカーに乗ったことがある。思ったよりスピードがあり爽快だった。上賀茂神社の神馬も時代祭の馬の行列も見たが、学生時代に赤い乗馬服を着た京大馬術部の女子学生が市電通りを馬に乗って一人闊歩しているのを目にしたことがある。それを眩しうに見ていた女性の姿を今も覚えている。今月も両地に生きる動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、フィアカーの写真を掲載させていただく。

行政機関として近年、毎回参加している原子力規制庁の担当者は、官庁訪問など、採用に向けた努力の一方で、国家公務員全般を通じて「定員割れが生じている」と人材確保の厳しさを強調。ブースでは今回も、頻繁に説明時間を設けており、新卒に限らず、経験者採用

観光スポットを英語で案内してくれる。馬たちは、日光のない時間帯には街の厩舎で飼育されており、厩舎では馬たちが休憩し、食事・健康管理が行われ、獣医による定期診断も受けている。この他、王宮すぐ脇のスペイン乗馬学校では、リビッツァーナー種の白馬た

■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長

